



# 悲しみの化身

---

スパイダー

---

春日信彦

---

## シェルティ

亜紀は白いテーブルが二つ置いてある甘党茶屋の玄関前の庭で遊んでいた。北側からやってきた大きな黒いベントレーがゆっくり庭の前で停まった。車の中には、運転手と後席に50歳前後の燕尾服を着た男が座っていた。その男は、身なりを確認し、ゆっくりと車を降りると亜紀のほうにやってきた。亜紀は、突っ立って、近づいてくる燕尾服を着た男をじっと見つめていた。玄関に続く細長い通路の入り口にやってくると、その男は亜紀に声をかけた。「かわいいお嬢ちゃんは、亜紀ちゃんかな。アンナお嬢様は、いらっしゃいますか？執事が伺いました、と伝えてくれるかな」その男は、亜紀に微笑んだ。

亜紀は、始めて見る燕尾服を着た男に声をかけられ、目を丸くして店にとんで入っていった。そのとき、さやかが、ご婦人3人のお客を送り出していた。「さやか、黒い服を着たおじさんが、ママを呼んでるよ。あそこ」亜紀は、窓から見える燕尾服の男を指差した。さやかは、大きな車と執事を見て、誰の使いか見当がついた。「亜紀ちゃんは、あのおじちゃんをテーブルに案内してちょうだい。すぐに、アンナを呼んでくるから」さやかは、亜紀にお願いすると、厨房にいるアンナを呼びに駆けて行った。

アンナは、大きなお腹をゆっくりさすりながら、薄茶色の丸椅子に腰掛け、来月生まれてくる子供のことをぼんやり考えていた。さやかは、アンナの前に立って小さな声で話しかけた。「アンナ、アンナにお客さんよ。ちょっときて」アンナは、いったい誰が訪ねてきたのだろうかと考えてみたが、まったく見当がつかなかった。お腹に下から手を当て、よっこらしよ、と腰を持ち上げたアンナは、お相撲さんのように外またでゆっくり歩き出した。

お店に出ると、執事がテーブルの席に腰掛け、亜紀と小さな声で楽しそうに話をしていた。アンナが、お腹を突き出して、ゆっくりお店に顔を出すと、執事は、すぐに席を立ち、深々とお辞儀した。「アンナお嬢様、お久しぶりです。憶えていらっしゃいますか？」執事は、大きなお腹をチラッと見て微笑み、挨拶をした。アンナは、口ひげをはやした男をまったく覚えていなかった。覚えていないと言うと失礼のようで、かと言って、覚えているとも言えなかったので、ぼやかして答えた。

「もしかして、迎えに来てくれた、あの時の方かしら。どうぞ、お座りください」アンナは、つくり笑顔で答え、執事に腰を下ろすように声をかけ、アンナも、執事の前の席に腰を下ろした。「そうです、よかった、あの時の執事です。アンナお嬢様、来月でいらっしゃいますね。おめでとうございます。今日は、お嬢さまが必要なものを準備するように仰せつかりました。何か、ご希望なされるものがあれば何なりとおっしゃってくださいませ」執事は、会長の指示を単刀直入に伝えた。

アンナは、突然の話に戸惑ってしまった。すでに、出産の準備はできていた。特に、申し出るものはなかった。「ありがとうございます。会長によろしくお伝えください。すでに、準備はできています。いま、これとって、別にありません。わざわざ、お越しいただいて恐縮です。お気持ちだけで、十分です。本当に、ありがとうございます」アンナは、ハンカチを取り出し、目頭を押さえた。

会長は、アンナの返答を見越してプレゼントを準備していた。執事は、二度頷き、話しを続けた。「会長の道楽と思いになって、お聞きください。ところで、今、お車は何に乗っていらっしゃいますか？」執事は、アンナの車を確認した。「今は、主人が残したプリウスに乗っています」アンナは、ハンカチを折りたたみ、ほんの少し笑顔を作った。執事は大きく頷き、窓に顔を向けた。

「お嬢様、あちらに停まっている車をご覧ください。ベントレーの新型フライングスパーです。乗り心地はマシュマロのようで、お子様とお買い物に行かれるには最適なお車と存じます。車内は、ハリウッドスターの豪邸と思わせる豪華絢爛な内装となっています。よろしければ、お嬢様のお好みの色のフライングスパーを手配いたしたいと思いますが、いかがでしょうか？」執事は、会長の指示を適当に脚色して、フライングスパーのプレゼントを申し出た。

アンナは、威厳を放っている場違いな高級車を窓越しに見つめ、目じりを下げた。「え、あの車ですか？とんでもない、あんな高級車、私たちにはもったいない。先程、申しあげましたとおり、準備は整っています。ご心配なく」アンナは、会長の押しつけに少しムカついた。さやかは、目をクリクリさせて口を挟んだ。「アンナ、だったら、何か別のものをプレゼントしてもらえば？会長のご好意なんだから」さやかは、せこい考えを持ち出した。

執事は、さやかに顔を向け、頷き、話した。「会長の道楽と思われて、何かお望みのものはございませんか？私も、このまま帰るわけには、参りません。なにとぞ、何かご要望をおっしゃってくださいませ」執事は、頭を下げた。アンナは、困り果てた顔で、もう一度窓越しに黒い車を眺めた。どうしようかと悩みながら、目を戻し、亜紀に顔を向けると目と目が合った。「あ、そうだ、亜紀、何かほしいものない。このおじちゃんが、ほしいものを買ってあげるって」亜紀に矛先を向けた。

亜紀には、アンナにまだ話していないほしいものがあった。亜紀は、少し悩んだふりをして、小さな声で答えた。「犬がほしい。かわいい子犬」犬と聞いたアンナは、一瞬返答に困った。子供が生まれるというときに犬を飼っても面倒を見られるか不安だった。しかも、アンナは、一度もペットを飼ったことがなかった。「え、犬。面倒は誰が見るの？」アンナは、気がすすまなかった。「亜紀が、ちゃんと世話をする。だから、お願い」亜紀は、両手を合わせた。

さやかは、ペットを飼うことに賛成だった。亜紀の気持ちを察していた。子供が生まれれば、アンナは、子供にかかりっきりになる。そうなれば、きっと、亜紀は、寂しい気持ちになるに違いなかった。亜紀は、そのことを直感して犬のペットを欲しがった、とさやかは考えた。「いいじゃない、アンナ、私も、亜紀と一緒に、面倒見るわ」さやかは、アンナの左肩をポンと叩いた。アンナは、しばらく黙っていたが、かわいい子犬と子供が遊ぶ姿を思い浮かべ、賛成することにした。

「そこまで言うんなら、犬を飼ってみようか。そういうことで、子犬をプレゼントしてください」唐突に、執事に話を振った。執事は、一瞬、目を大きく見開き、笑顔を作りながら、返事した。「喜んで！子犬でございますね。どんな子犬をご希望ですか？」執事は、左横の亜紀の顔を覗いた。亜紀には、すでに飼いたい犬は決まっていた。「シェルティが欲しい」亜紀は、大きな声で返事した。

執事は、大きく頷き、返事した。「かしこまりました。血統書付きのシェルティを後日お届けに参らせます。オス・メスどちらにいたしましょうか？」執事は、再度、亜紀に顔を向けて訪ねた。「男の子がいい」亜紀は、喜色満面で肩をすくめ答えた。アンナは、シェルティという犬がどんな犬か知らなかったが、子犬のかわいい顔を思い浮かべると、うれしくなってきた。執事もほっとした笑顔を見せた。アンナは車のプレゼントを断ったが、さやかは、BMWの車が欲しかった。「アンナ、この際だから、車も買ってもらいましょうよ。ほら、BMWが欲しいと言ってたじゃない」さやかは、アンナに声をかけると、執事に顔を向けた。

執事は、即座に返事した。「はい、承知いたしました。BMWですね。M5セダンでよろしいですか？近くのディーラーといえば、地行のBalcom BMWで購入いたしましょう」アンナは、さやかの独断にあきれ返ったが、これ以上断るのも気まずいような気がして、プレゼントしてもらうことにした。「それじゃ、オスの子犬とアイボリーのBMWをお願いします。会長には、どのようにお礼をしいか、本当にありがとうございます」アンナは、深々と頭を下げた。びっくりした、執事は、即座に声をかけた。

「お嬢様、お礼だなんて、会長のお気持ちでございます。これで、私も任務を果たし、胸を張って帰れます。お体にお気をつけられて、元気な赤ちゃんをご出産なされることを心より願っています。もし、何かあれば、執事にお電話くださいませ」執事は、携帯の電話番号が書かれた名刺をアンナの前に差し出した。アンナは、そっと受け取ると、名刺を両手で包み込んだ。執事は、安心した笑顔で席を立ち、深々とお辞儀をして、ベントレーに向かった。

亜紀も執事の後を追って、外に飛び出していった。子犬をプレゼントしてくれたおじさんが大好きになったみたいであった。ベントレーが動き出すと、亜紀は大きく手を振って、大きな声で「ありがとう」とお礼の言葉を叫んだ。「亜紀ったら、本当に子犬が欲しかったのね。あんなに喜んでいる姿、始めてみたわ。拓也がいなくなって寂しかったのね。そういえば、最近、亜紀のこと、ほったらかしにしていなかったかしら。お腹の子のことばかり考えていたから」アンナは、亜紀の後姿を見て、今の自分の心を振り返った。

さやかも亜紀の後姿を見て、改めて、亜紀の成長に気づいた。「亜紀って、気が効く子よね。きっと、立派な軍人になれるわ」さやかは、ちょっと冗談を言った。アンナは、またかと思い、さやかをにらみつけた。「早く、子犬こないかな～、楽しみだわ」さやかはルンルン気分で亜紀のところにスキップして駆け寄って行った。二人は、笑顔で話し始めた。亜紀は、さやかを見上げ訊ねた。

「あのやさしいなおじさん、誰なの？」亜紀は、突然やってきて、アンナをお嬢さんと呼びかけた紳士に疑問を抱いた。「あ～、あのおじさんね。あのおじさんは、会長の執事なの。まあ、会長のお手伝いさんみたいなものね。今日は、会長の命令でやってきたみたいよ」さやかは、子供にも分かるように答えた。亜紀は、まだよく分からない顔をして、訊ねた。「会長って、誰なの？偉い人？金持ちなの？」亜紀は、会長という言葉が頭の中で飛び跳ねていた。

さやかは、ほんの少し考えた。さやかも会長の本当の素性を知らなかった。単なる憶測で、アンナの父親であると思っていたに過ぎなかった。このことは十中八九当たっていると確信していたが、確証はなかった。会長のことを父親と言おうと思ったが、おじいちゃんにすることにした。「会長って、とっても親切なおじいちゃんなの。だから、思いっきし、甘えていいのよ、亜紀。お金は、腐るほど持ってるんだから」さやかは、子供たちを殺し続けている化学兵器を製造販売して、金儲けしている得体の知れないクソじいから、汚い金をむしりとることにしていた。

亜紀は、おじいちゃんと聞いて会いたくなかった。「え～～、ママにおじいちゃんがいたの。いつか会いたいな～」亜紀は、パット笑顔を輝かせた。「あ、まあ、いつか、会えるときが来るかもね。おじいちゃんは、南の大きな島にたくさんの召使に囲まれて、気楽に生活しているの。でも、とても人と会うのを嫌っていて、少し変人なのよ。だから、人とは直接会わないのよ。だから、今日も、執事をアンナのところによこしたってわけ」さやかは、すぐには会えないように、適当に話を作った。

亜紀の頭に、やさしいおじいちゃんの姿が浮かび上がり、ますます興味が湧いてきた。「だったら、いつか、おじいちゃんのところに遊びに行こうね、さやか。約束よ。おじいちゃん、犬好きかな～、シェルティ連れて遊びに行こうよ。良いでしょ」亜紀は、南の島と聞いて、樂園のようなところを思い浮かべ、すぐにでも行きたい気分になってしまった。さやかは、南の島と言ったことに後悔した。確かに南の島には違いなかったが、その島は、化学兵器を作っている人工の魔界島だったからだ。

さやかは、おじいちゃんの話から、子犬の話に替えることにした。「そうだ、今度来る子犬の名前、なんにするの？もう決めてるの？」さやかは、最も気にしている子犬の話を持ち出した。「子犬の名前、う～ん、なにがいい、さやか」亜紀の頭が、子犬のことに切り替わったことで、ほっとした。これ以上、会長の話をしていたら、ますます作り話をしなければならなかったからだ。

さやかは、悩んだ顔をして答えた。「そうね～、男の子だから、太郎はどう？」さやかは、ありふれた名前をとりあえず言ってみた。亜紀は、さやかをダサい大人と思った。あまりにも、ありふれた名前を平然と言ったさやかに少しがっかりした。「太郎・・・今時、はやんないんじゃない、もっとかっこいい名前、ないかな～、スパイダーってのは、どうかな～？」亜紀は、スパイダーマンを思い浮かべて言ってみた。

かっこいいようでもスパイダーは蜘蛛の意味だから、ちょっと犬の名前にはふさわしくないと思った。「でも、スパイダーって、蜘蛛ってことじゃない。犬が蜘蛛じゃ、おかしくない？」さやかは、ちょっと反対した。亜紀は、振り向くと歩き始めた。さやかは、亜紀の機嫌をそこねたのではないかと思い、すぐに後を追った。店内のテーブルに戻ってみると、アンナの姿はなかった。「ママは、厨房かな？」亜紀は、厨房に向かって歩いていった。

アンナは、厨房の丸椅子でぼんやりしていた。「ママ、親切なおじちゃん見送ってきた」亜紀は、アンナの横に立ち大きなお腹をじっと見つめた。「お腹の赤ちゃん、来月生まれるのね。弟かな～、妹かな～、早く、見たいよ～、」亜紀は、お腹をそっとさすった。「どっちが生まれても、かわいがってね。初めての赤ちゃんだから、ちょっと心配だけど、頑張って生むからね、亜紀。応援してね」アンナは、男の子が生まれることをさやかには教えていたが、亜紀には黙っていた。

拓也の子供を生むことに喜びを感じてはいたが、一人ぼっちで子供を生むようで心細かった。「アンナ、亜紀もさやかも、ついているじゃない。ド～ンと太っ腹で、産めばいいのよ」さやかは、アンナが孤児である自分たちのことを卑屈に思っているのではないかと心配した。「そうよね、亜紀もさやかも拓也も、みんな見守っているのよね。元気が出てきた、元気で、明るい子を産んでみせる。よし」アンナの不安な顔が、一気に笑顔に変わった。

亜紀も笑顔を作った。「それに、南の島のおじいちゃんも、さっきのやさしいおじちゃんも、今度来るシェルティも、みんなママを応援してるよ。ママ、ファイト！」亜紀は、アンナの笑顔を見つめ、声を張り上げた。アンナは、亜紀の励ましの言葉に感心し、きっと優しいお姉ちゃんになれると確信した。アンナは、ちょっと、きょとんとした表情で訊ねた。「亜紀、南の島のおじいさんって、誰？」アンナは、小さな声で訊ねた。

亜紀は、大きな目をして答えた。「ママのおじいちゃんのことよ。大金持ちの」亜紀は、さやかが話したおじいちゃんのことを言っていた。アンナは、しばらく考えて、ぼそりと言った。「おじいちゃん、南の島の？」アンナは、さやかの顔を見つめた。さやかは、とっさに作り笑いをして答えた。「ほら、おじいちゃんよ。ほら、会長！親切で、金持ちの」さやかは、アンナに右目を閉じてウインクした。

さやかが、またもや、いいかげんなことを言ったな、とアンナは心で思ったが、会長のことは亜紀に話したくなかったため、さやかの言うとおりに、おじいちゃんにしておくことにした。「あ、そう、おじいちゃんね、そうよね」アンナは、適当に応えてしまった。亜紀は、大きなお腹をゆっくりさすりながら、話を続けた。「ママ、生まれてくる子供の名前、もう、決まってるの？」亜紀は、アンナが考えている名前が知りたかった。

アンナは、頷き、もったいぶって答えた。「聞きたい？一応、考えているのよ。男の子だったら、拓実。女の子だったら、麻里子。どうかしら」アンナは、心に決めた名前を言ってみた。亜紀は、素直に賛成した。「麻里子、ママが好きな篠田麻里子の麻里子ね、拓実はパパの拓也の拓を取って拓実ね。亜紀もいいと思う」亜紀は、即座に名前の由来がひらめき、言葉に出した。アンナは、目を輝かせ、亜紀の右肩に手を置いた。

「そお、いい名前と思う。でも、よく分かったわね。亜紀って、ほんと、賢いわね」アンナは、亜紀の賢さにはいつも感心していたが、このときばかりは、即座に応えたことであっけにとられた。亜紀の横で聞いていたさやかも賛成した。「いい名前じゃない。予定日は、12月2日、だったわね。でも、早く生まれることもあるらしいわよ。産宮神社におまいりに行きましょうよ」さやかは、安産の神様に元気な男の子が生まれることを祈願したかった。

今日は、3時に店じまいをし、三人で産宮神社におまいりに行くことにした。亜紀は、子犬が来ることになり、いつになく朗らかだった。「ママ、子犬はいつ来るの？明日？明後日？待ち遠しいな～。もう、名前は決めたのよ。名前は、スパイダー、さやかは、変だと言ってるのよ。ママは、どう思う？」亜紀は、スパイダーにこだわっていた。アンナは、亜紀の決めた名前に賛成することになっていた。

「良いじゃない、スパイダーマンのスパイダーね。かっこいいじゃない。正義の味方、スパイダードッグというわけね。家族を守ってくれるスパイダーね。亜紀、考えたわね」アンナは、笑顔で賛成した。さやかは、そこまで考えなかった。アンナは、やはり母親だった。亜紀が、なぜ、名前をスパイダーにしたかを即座に理解した。母親になるとこんなにも、子供の心を理解できるようになるものかと感心した。

さやかは、スパイダーの意味を蜘蛛としか思わなかった浅知恵に、少し恥ずかしくなった。今度ばかりはアンナにしてやられた。「そうだったのか。そういう意味ね。さやかも、スパイダーに賛成」さやかは、亜紀の左肩をポンと叩いた。「子犬は、どの部屋にする？洋間が一つ空いてるわね」さやかは、6畳の洋間を子犬の部屋にする提案をしたが、アンナは、犬は庭で飼うものと思っていた。

「え、犬を家の中で飼うの？庭じゃ、いけないの？」アンナは、犬が赤ちゃんを襲うんじゃないかと一瞬おびえた。亜紀が、笑顔を作り、アンナの誤解をすぐに察知した。「ママ、大丈夫よ。犬って、子供が大好きなのよ。それに、犬は子供のボディーガードになってくれるのよ。犬って、賢いんだから」亜紀は、友達の家の子犬を見て、そのことを理解していた。アンナは、頷き、家で飼うことに賛成した。

「そう、それじゃ、空いている部屋で飼いましょう。亜紀、ちゃんと面倒見てよ。ママは、犬のこと、まったくわかんないんだから。さやかも頼むわよ」アンナは、初めて飼う犬に少し不安であったが、かわいい子犬が来ることに心が躍っていた。「早く、子犬が来るといいね。さっそく、犬のえさを買わなくっちゃね」アンナは、犬を飼うのに必要なものはよくわからなかったが、えさのことは即座にぴんと来た。

さやかが、頷き応えた。「ペットショップに行って、必要なものを買ったらいいじゃない。産宮神社の帰りにペットショップに寄りましょう」さやかは、予定を立てた。亜紀が突然ガッツポーズをした。「友達がダックスフンドを飼っているの、だから、必要なものは大体わかるよ。ケージ、トイレシート、お皿、首輪、リード、おもちゃ、ドッグフード、ブラシ、消臭剤、まずはこんなところかな」亜紀は、犬を飼っている部屋を思い浮かべながら、必要品を並べた。

さやかもペットを飼うのは初めてで、いろいろなものが必要なことに目を丸くした。「いろいろなものが必要なのね。ペットを飼うって大変みたいね」さやかは、少し自信をなくした。アンナも少し不安になってきた。「犬も病気するわよね。病気したらどうしよう。発情したら、オスは暴れるんじゃないかしら」アンナは、さやかに訊ねた。「動物病院に連れて行くしかないわね。病院も調べなくっちゃね」さやかは、病気のことを言われ、さらに憂鬱になってしまった。

亜紀は、二人が憂鬱な顔を始めたので、子犬のことを話すことにした。「子犬って、とってもかわいいんだから。ちゃんと世話をすれば、病気になんか、ならないよ。犬も人間と同じよ。かわいがってやれば、元気に育つんだから。みんなで、かわいがる！」亜紀は、子犬のかわいいイメージを強調した。「そうよね、犬も家族だもの。仲良くすれば、元気に育つんじゃない。分からないことは、獣医に聞けばいいのよ」さやかは、亜紀の気持ちを汲んで、亜紀に賛成した。

## 作文

亜紀には、誰にも言えない悩みがあった。それは、突然、実の母親、知美を思い出すことの悲しみであった。11月20日までに作文を提出しなければならなかったが、作文のテーマは、“家族”だった。亜紀は、作文は、最も好きで得意であったが、今回の家族のテーマは、亜紀を苦しめていた。亜紀の言語力は、群を抜いて秀でていた。小学1年生にして、高学年の言語力を備えていた。それは、遺伝的なものかもしれなかったが、拓也の読み聞かせが大いに効をそうしていたに違いなかった。

亜紀は、毎日日記をつけていた。だから、どんなテーマの作文も一瞬のうちにイメージがひらめき、次から次へと言葉が湧き出ていた。家族のテーマの作文も、最初は、母親のアンナ、不思議な友達さやか、入学式を終えてまもなく亡くなった父親の拓也、などについて、一気に言葉が湧き出た。ところが、いざ、書き始めると、なぜか、突然消えうせた実の母親、知美の姿が脳裏に現れるようになり、さらに、犬死した弟の俊介までも現れるようになった。そして、次第に、それらが、亜紀を悲しみの渦に巻き込むようになった。

あの時の忌まわしい生活の様子が、亡霊のように頭の中をうごめくようになっていた。亜紀は、さやかとアンナに助けられ、拓也に実の親以上の愛情を注がれ、忌々しい過去はすべて消え去ったと思っていた。現に、拓也に育てられてからは、一度もあの時の過去を思い出さなかった。どうして、今頃になって、あの時のことを思い出さようになったのだろうと不思議に思った。

亜紀は、突然目の前から姿を消した実の母親を恨んではない。いや、恨むと言う気持ちを持ちたくないと自分に言い聞かせてきた。何か事情があって、会いに来られないのかもしれない。もしかすると、明日にでも、突然目の前に現れるかもしれないと思ったりもした。弟の俊介は、もし母親がいたならば、助かっていたに違いないと思ったが、それでも、母親を恨む気持ちにはなれなかった。亜紀にとって、実の母親、知美は、永遠に愛する母親であった。

亜紀は、6歳のときに拓也に買ってもらったノートパソコンを今も使っている。毎日、キーボードを叩いている。亜紀は、心の底で眠っている得体の知れない悲しみを起こしたくなかった。時々、ふと悲しみがこみ上げることがあった。この悲しみは、何もできずに目の前で弟を亡くした悲しみなのか、突然目の前から消えてしまった母親を思っただけの悲しみなのか、やさしかった拓也の死による悲しみなのか、原因は分からなかったが、原因を追究する気持ちにはなれなかった。

。

気がついたときには、悲しみを紛らわすためにキーボードを叩いていた。ピアノを弾いて集中することで悲しみを忘れることもあったが、やはり、言葉を生み出していないと悲しみは消え去ろうとはしなかった。亜紀は、毎日、いろんな言葉を生み出した。この言葉は、自然に湧いてくるものであったが、やはり、悲しみを忘れるための習慣だった。亜紀にとって、書くことは、呼吸と同じようになっていた。一日たりとも、書かずに過ごすことができなくなっていた。

実の父親のように読み聞かせをしてくれた拓也、実の母親、知美以上に優しいアンナ、親身に話を聞いてくれる親友のようなさやか、彼らのことを毎日、書き記しているにもかかわらず、彼らについて作文を書くことになったとたんに、どこからか、亡霊のような母親、知美が現れるようになった。だからといって、母親、知美について何か書く気持ちにはなれず、言葉も生まれなかった。ぼんやりとした母親の姿を、しっかり見つめたいような、消し去りたいような、自分でもはっきりしない、もやもやした気持ちになった。

得体の知れない悲しみが襲ってくるようになったとき、ふと、犬の顔が目の前に現れた。その犬は、親友が飼っていたダックスフンドの顔だったが、一瞬、心がぱっと開放されたように、気分が晴れやかになった。そのときから、犬を飼いたいと思うようになった。ネットで犬の動画を見ているうち、シェルティに一目ぼれをしてしまった。そして、無性に欲しくなり、機会があれば、アンナにねだる気持ちでいた。

犬を見ていると、自分の気持ちを聞いて欲しくなるのだった。誰にも言えない本当の気持ちを犬に聞いて欲しかった。自分にも分からない得体の知れない悲しみを犬に聞いて欲しかった。そして、犬を家族の一員として作文に書きたかった。そのことが頭に浮かんでからは、家族の作文が書けるような気持になった。子犬が早く来ないかといっても立ってもいられなくなった。

## スパイダー

やさしい執事の約束の日から3日後、待ちに待った子犬のシェルティがやってきた。子犬は、浦志にあるドッグファミリーからやってきた。そこは、先日のぞいたペットショップで、執事はこの店にシェルティを依頼していた。執事は、子犬だけでなく、子犬を飼うために必要なもろもろの物も依頼していた。ペットサークル、ベッド、クレート、皿、ドッグフード、トイレシート、首輪、リード、おもちゃ、などもそろえて持ってきてくれた。

子犬は、血統書つきの生後2ヶ月で、とてもかわいらしかった。毛色はトライで、顔は黒、目の上が茶色、口は白っぽく、亜紀好みの顔であった。さっそく、犬の部屋にしては豪華な6畳の部屋に子犬を運んでいった。亜紀は、子犬を見つめスパイダーと呼んでみた。子犬は、まったく反応しなかったが、亜紀の心はルンルンであった。今まで、自分の気持ちをマジでぶつけられる相手がいなくて、欲求不満になっていたが、子犬を見ているだけで気持ちがスカッとしてきた。

さやかもアンナンも亜紀も、誰もペットを飼うのは初めてであった。食事の与え方やトイレのしつけ方もまったく分からなかった。食事は、今まで与えていた総合栄養食のドッグフードを与えるように、また、トイレは、決まった場所に連れて行き、そこでさせて、うまくいったら褒めるように店主に教えられた。もし、体調がおかしいと思ったときは、獣医に相談したほうがいとアドバイスしてもらった。動物病院は、ドッグファミリー近くにあると教えられた。

子犬のスパイダーは、一目見たときから、大好きになり、亜紀は、片時も離れたくないと思った。「亜紀、よかったわね。こんなにシェルティがかわいいなんて思ってもいなかったわ」さやかは、亜紀に微笑んで言った。「うん、かわいくて抱きしめたい。でも、まだ、おどおど、してるみたい。しばらくは、そっと、かわいがるように言われたね。まだ、この部屋に慣れてないし、亜紀とも初対面だしね」亜紀は、見ているだけで、気持ちがハイになってしまった。

その日の夜は、スパイダーをクレートに入れて、ベッドのそばに置き寝ることにした。スパイダーは、クンクンと悲しい声を出し、なかなか寝ついてくれなかった。やっと、9時ごろ泣きつかれたのか眠りについた。亜紀は、スパイダーが眠りにつくまでずっと見守っていた。眠りについたスパイダーを見届けると、心が落ち着き亜紀も眠れる気持になった。スパイダーに小さな声で「おやすみ」と声をかけ、亜紀も目を閉じた。

眠りについたスパイダーは、亜紀の夢の中で目を覚ましていた。スパイダーは、亜紀の頬をペロペロ舐めていた。夢の中の亜紀は、ぱっと目を見開いた。「くすぐったいじゃない、もう」亜紀はスパイダーを抱きかかえて、ベッドに腰掛けた。すると、スパイダーの顔がりりしくなった。「お姉ちゃん、僕だよ。また、会えたね。あの日は、お腹、ペコペコで眠っちゃったよ。ごめんね、お姉ちゃん」スパイダーは、突然話しかけた。犬のスパイダーがしゃべった。亜紀は、はっとした。その声は、紛れもない俊介の声だった。

「シュンなのね。シュンは、死んで犬になったの。犬になって、お姉ちゃんのところに帰ってきてくれたのね。人間は、死んでも生まれ変わるってほんとだったのね。よかった。シュンが元気で。シュンが、人間でなくても、お姉ちゃんは、大丈夫。あのころと同じように、シュンを面倒見るから。話したいことがあれば、何でも話して。何か欲しいものがあるれば、何でも言って」亜紀は、スパイダーになったシュンに歓迎の言葉を掛けた。

スパイダーは、さらに低い声で話しかけた。「パパだよ、亜紀。元気そうじゃないか。小学校は慣れたかい。12月2日に生まれてくる、拓実をかわいがってくれよな」この声は、拓也の声だった。亜紀は、信じられない声に周りを見回した。「え、パパなの。どこにいるの」ここだよ。目の前にいるじゃないか。「まさか、パパが、スパイダーなの？今、スパイダーは、シュンだったのよ。スパイダーは、シュンなの？それともパパなの？」亜紀は、スパイダーに問いかけた。

スパイダーは、答えた。「スパイダーは、亜紀が会いたい人になるのよ。だから、スパイダーは、亜紀の悲しみの化身なの」スパイダーは、知美の声で答えた。「まさか、今の声は、ママね。今、どこにいるの？早く帰ってきて。亜紀は、糸島市の平原公園の近くの家にいるの。今のママは、アンナというの。でも、会いたい。どこにいるの、ママ」亜紀は、知美の声を確かに聞いた。

「クンクン」子犬の鳴く声が、亜紀の耳に飛び込んできた。亜紀のまぶたがパッと開いた。目じりからは、細い涙が流れていた。亜紀が半身になって、クレートの中を覗くと、スパイダーが、クルクル回りながら泣いていた。亜紀が、スパイダーと声をかけると、おしっこをした。目覚まし時計は6時少し前だったが、スパイダーをクレートから取り出し、抱きかかえ、もう一度、スパイダーと一緒にベッドにもぐりこんだ。スパイダーは、亜紀の胸元ではしゃぎ、亜紀の涙をペロペロ舐めはじめた。

亜紀は、スパイダーに話しかけた。「おい、スパイダー、よく聞け、夢に僕ちゃんが出てきたぞ。僕ちゃんは、いたずらっ子だな」亜紀は、真剣な顔でスパイダーを見つめた。スパイダーは、ニッコリ笑って答えた。「え、僕の夢を見たの。やっぱり。僕は、亜紀をからかうためにやって来た、いたずらっ子だよ。これから、よろしくね」スパイダーは、シュンの声で日本語をしゃべった。

8時になると、スパイダーを犬部屋に運んでいった。そして、キッチンに出てみると、アンナが、食事の準備をしていた。「亜紀、スパイダーは、おとなしく寝てくれた？」アンナは、スパイダーが泣きつづけて、亜紀が眠れなかったのではないかと心配した。「スパイダーは、おりこうさん、だったよ。それに、たくさんお話もしたし」亜紀は、スパイダーが、話せることをアンナに伝えた。

アンナは、適当に聞き流し、亜紀に食事の準備を手伝うように言った。「亜紀、このお皿、いつものように並べて。そう、バーバラ先生は、お泊りだったの。三人分でいいわ」バーバラ先生は、最近、友達の家到时々泊まっていた。「あ〜、スパイダーを紹介したかったのに、つまらない」亜紀は、スパイダーを見せて、バーバラ先生をびっくりさせたかった。「さっさと、ならべなさい」ぐずっている亜紀に、強い口調で指示した。

亜紀は、しゅしゅお皿を運び始めた。「ママ、12月2日、弟が生まれるのね。楽しみね。亜紀は、弟が欲しかったから、バリうれしい」亜紀は、夢で拓也が話してくれたことを思い出しながら、何気なく話した。「あら、さやかね、口が軽いんだから、ほんとに」アンナは、男の子が生まれることをさやかが話したと勘違いした。「ママ、さやかじゃないよ。パパからよ」亜紀は、笑顔で教えた。

## 悲しみの化身

<http://p.booklog.jp/book/79052>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79052>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79052>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ